

特集「心臓の発生・再生・創生」によせて

栗原 裕基

(東京大学 大学院医学系研究科 代謝生理化学)

川崎病, 高安病, Vogt-小柳-原田病をはじめ, 日本人の名前が冠せられた疾患はいくつかあるが, “高尾症候群”という疾患名をご存知でしょうか? 東京女子医科大学循環器小児科の初代教授であった高尾篤良博士は, Fallot 四徴症など, ある種の先天性心疾患が特徴的な顔貌を伴うことを, “円錐動脈幹異常顔貌症候群”という疾患名で 1976 年に世界に先駆けて報告した。その後, 胸腺低形成による免疫不全を主徴とする “DiGeorge 症候群”や, Shprintzen 博士によって報告された “Velocardiofacial 症候群”と同一の疾患群であることがわかり, 現在では同一の染色体領域に異常を認めることから, “染色体 22q11.2 欠失症候群”と総称されている。しかし, 高尾先生の業績は忘れられることはなく, 今でも海外の研究者による論文にも「chromosome 22q11.2 deletion syndrome (also known as Takao syndrome)」としてしばしば引用されている。

この症候群は, 心臓の発生学と臨床医学, さらにヒト遺伝学との橋渡しをしてきたという点でも循環器病学における意義は大変に大きい。そのことを極めて早い時期に炯眼をもって予見し, 先天性疾患を基盤とした発生学, 遺伝学をわが国で育てたのも高尾先生であった。そして, お名前そのままの温厚篤実なお人柄で, 小児科医として患者さんやご家族から大変慕われ, 厚く信頼されていたという。優れた臨床医であり研究者, さらに教育者として, 筆者を含むこの領域の研究者にとっては常に仰ぎ見る存在であった。

高尾先生が 2006 年に 81 歳で逝去されてからすでに 10 年以上経った今日, 心臓発生の研究は先天性心疾患のみならず, 心筋症や不整脈などの発症基盤としても理解されるようになり, 臨床医学との接点はさらに広がっている。心臓再生やゲノム研究, さらに新しい技術創生の領域を含め, 関連分野での日本人研究者の貢献は大きい。今回の特集では, 心臓を“創る”という視点で, 心臓発生に関連の深い分野で世界的に活躍されている先生方をお願いして, 最新の知見を紹介していただいた。これまで, 特に医学の中ではどちらかと言えばマイナーであった臓器発生の研究から, 再生・創生とつながっていく広がり, 本特集でイメージしていただけると幸いである。高尾先生がもしご存命だったら, 本特集をどのように読まれるだろうか。